

回 想

国際文化学科 神 山 順 一

時のいたずらということがある。平成二年の暮れも押しつまった頃、駒澤学園が新しい四年制学部を設置を決意したとき、たまたま短期大学保育科の専任だった私に、当時の理事長・短大学長であられた上田租峯先生からとつぜん大命が下った。私は大学設置準備室主任を命ぜられ、新設大学の青写真作成に当たることになった。もとよりそのような仕事に経験などあろうはずもなく、自信も見通しも皆無だったが、周囲の方々のお力に支えられて、幸いにも文部省の認可を獲得し、平成五年の開学を見ることができた。

私が担当したのは、主として新しい大学の性格を構想し、カリキュラムの作成と教員組織の編成に当たり、同時にこれに関する申請書類をつくって、文部省の担当官と折衝を重ねることであった。文部省の壁は厚かった。学部学科の新増設は原則として抑制するという方針が出た直後であったためもあって、当初のプランはほとんど跡形もないほどの変更を余儀なくされたが、それにしてもよくもまあ開学にまで漕ぎ着けたものだ、振り返って感慨無量のものがある。

完全な白紙状態から出発したとはいえ、プランの作成に当たっては、最初から動かし難い前提条件が二つあった。その一つは、駒澤学園の建学の精神を貫く大学をつくること、もう一つは、文部省の認可を得

ることであった。文部省はじめ、看護学部なら認可し易い、その他の学部では難しいと言ったのである。しかし何にしても文部省の認可を得なければ元も子もない。現在の形を見るまでには、それこそ筆舌につくしきれない紆余曲折を経なければならなかった。

だがそれにしても、右の二つの条件の下でいざ具体的にどのような大学をつくるかを考えはじめたとき、私は一体何をイメージしていたのだろうか。当時の無我夢中状態から時をへだてて、かえって今になってようやく臆気にその何かが見えるような気がする。思い切って言うてしまえば、それは自分がかつて学んだ旧制高等学校の文科であった。私は心のどこかでそれをイメージの下敷きにしていたように思う。

もちろんのことだが、現在の四年制大学と戦前戦中の旧制高校とのあいだには、到底越すことのできない性格の違いがある。その違いを数え上げたら切りのない話になるのだが、私はたまたま戦後まもなく昭和二十年代におこなわれた学制改革の渦中に学生だったから、新旧の大学の両方が、単に制度としてだけでなく、具体的に見えるのである。今の大学制度がすでに出来上ってしまっただけからそこに入った若い人とはその点がちがうと思う。

旧い制度では、中学は五年制であり、その上の高校三年間の課程を修了してから、更にその上の三年制の大学学部に進んだ。高校だけで学部に進学しない者は原則としてあり得なかったから、当時の高等教育は高校と学部を合わせて六年間の課程であった。

ところが新制では、それを上下から押しつぶすようにして、高校二年プラス学部二年の四年制にしてしまったのである。東大を例にとれ

ば駒場（旧第一高等学校）の教養課程と本郷の学部を結びつけた形がそれである。仙台の二高と東北大学。京都の三高と京都大学も同じ形をとった。

一方、またそれとは別に、既存の大学と切り離された地方の高校は、それぞれ単独に自分の上にもう一年の課程を上乗せして四年制大学をつくった。私のかつて学んだ旧制松本高校は、そのような改革によって信州大学文理学部になったのである。同様にして例えば静岡高校は静岡大学になり、浦和高校は埼玉大学になった。アバウトな表現をすれば、旧制高校イコール四年制大学なのである。事実、大学になってからも多くの先生方はそのまま残りになった。私は卒業してからもしばしば松本へ行くたびに親しい先生方をお尋ねしたが、あまり変った感じはしなかった。要するに、私が新しい大学を構想するにあたって、わが母校旧制松本高校（以下略して松高）を念頭に浮かべたのは、ある意味では至極自然なことだったともいえるのである。

もっともそうはいっても、駒沢女子大のカリキュラムは旧制高校のそれを下敷にしたものではまったくない。両者はあまりにも性格を異にするからである。ただ敢えていえば、あの時私には旧制高校にたいするノスタルジアのようなものが湧きおこり、いわばその雰囲気、新しい大学構想に重ねたかったのだらうと思う。

○

たとえば松高では、誰もが先生方を「さん付け」で呼んだ。もちろ

ん面と向かって二人稱で呼びかけるときは「先生」といったが、三人稱では誰の前でもかならず「望月さん」「古川さん」だった。先生方のあいだでも、お互いを「さん付け」で呼んでおられた。入学してまもなくそのことに気付いて、私は非常に新鮮な印象を受けた。もう自分は中学生ではないのだと、急に大人になったような気がして嬉しかった。

なぜ「さん付け」だったのか。そんなことをわざわざ解説してくれる人はいないし、聞いたことも読んだこともない。だからこれはまったく私の自己流の解釈だが、なにかそこには先生方と生徒とを一緒に包み込む「同類意識」のようなものがあつたからではないかと思う。先生方にたいする敬意が足りないのではない。それどころか生徒は先生方を心底から敬愛していた。にもかかわらず、というよりもまさにそれ故に、先生方を「さん付け」で呼ぶことが嬉しかったのだ。

先生方はわれわれ生徒を、たとえ年齢が二十歳に満たない者であっても、あくまでも一人の紳士としてあつかって下さった。そして生徒の方では、目の前の先生がどんなに偉い方であっても、それは自分とまったく異質の人なのではなくて、言ってみれば「先輩」という言葉のニュアンスを含むような、少しずつでもそれに近づいていくべきモデルであつた。かならずしも先生のような学者や教授になりたいと思つたわけではない。そういう先生方の学問や専門のお仕事にたいしても、ろくに分かりもしないのに大いに敬意を懷いてはいたが、当時の自分の気持ちを正直に言ってみれば、むしろもっとほんやりと、先生方が共有しておられる豊かな教養の世界に今自分も一歩足を踏み入れ

たのだという誇りと、それが許されている喜びだったといつてよいだろう。先生方は、われわれ生徒のそういう気持ちをいつも温かく見ていて下さった。

たとえば、一年生のクラス担任だった哲学の武藤一雄さんのお宅に初めてうかがったとき、私は先生の書庫を垣間見て本当にびっくりした。私はそれまで一人の人であんなに沢山の本を持っている人を見たことがなかった。大きな書庫の四方の壁はもちろん、部屋の中にまるで図書館のような書架が何列も並んでいて、しかもその大部分が立派な分厚い洋書ばかりで埋まっていたのだ。それはもう本当にすごいと思った。そうしてそのすごい人と一対一で向かい合っている自分が嬉しかった。

ドイツ語の小栗浩さんの下宿には、三年生の頃しょっちゅうお邪魔した。小栗さんはその頃まだ独身で上浅間の下宿におられたが、そこが私の下宿から歩いて五分とかからぬ近さだったのだ。戦後まもなくの物資の乏しい時代だったので、ドブクロなどを手に入れると、まずは小栗さんの所へ持って行って、先生の炬燵で一緒に飲んだ。私はあまりドイツ語の出来のよくない生徒だったが、下宿の小栗さんは教室とはまったくちがう顔をしておられた。「もつとしっかりドイツ語を勉強しなさい」などとは一度もおっしゃらなかった。酔うと一緒にシューベルトのリートを歌ったりした。

私は小栗さんを相手にして、よくゲーテを論じた。「論ずる」となどという動詞は今の学生にとっては死語になってしまったが、当時の高校生はけっこう気分を出して大いに論じたのである。『イタリア紀行』に

ついでの一寸したこと、小栗さんの思いちがいやりこめて得意になったこともある。ずいぶん生意気だった。三年生の頃は明けても暮れてもゲーテばかり読んでいて、ゲーテが自分に乗り移っているような気分だった。幼稚とは自分が幼稚であることに気が付かない状態をいうのだろう。選りにも選って、のちに大著『ゲーテ研究』をお書きになった小栗さんの前で勝手な気炎をあげていたのだから、今思うと冷汗が出る。それでも小栗さんはいつもニコニコと相槌を打っていて下さった。

国文の古川久さんや東明雅さんのお宅にもたびたびお邪魔した。そしてよくご馳走になった。あの頃は今の若い人には想像もできないほどの食糧難の時代だった。どんなに空腹だったか、私と同期の理科生で、のちに作家になった北杜夫（斉藤宗吉）の『どくとるマンボウ青春記』を読んで下されば分かる。そういう時代に、腹ペコの若い男の子が押しかけて行くのだから、先生はもちろんだが、ことに奥さまはどんなにお困りになっただろう。それを思うと今でも申し訳なさに身の縮む思いがする。

しかしそれだけではない。私たち生徒が先生方から奪った最も貴重なものは「時間」ではなかったか。われわれ生徒は先生の時間を奪った。われわれの相手をするために、先生方はどれだけご自分の研究や読書を犠牲にされたことだろう。若さとは自己中心的なものである。たしかに一応は遠慮もしたのだが、けっきょくはいつも先生方のご好意に甘える結果になるばかりだった。今にして、先生方がどんなに無理をしてわれわれに尽して下さったかが分かるのである。

教育とは何だろうか。われわれはしばしば単に学生に知識を授けることと考えがちである。口ではそうは言わないにしても、実際にやっていることはそうなのだ。たしかにそれも教育の一面にはちがいないが、知識の教授という行為にはあまり痛みを感じられない。自分を権威者の位置において、自分の知識の一部を切り売りしていればそれで済むからである。

しかし、あの敗戦直後の松本という小さな町で、旧制高校の先生方はもう少しちがうことをわれわれにして下さった。それは自分の世界を開いて、その中に生徒を招き入れるということであった。私は本学を去る日を目前にして、しきりにそのことを思う。私は果して、先生方が私にして下さったと同じことを、自分の学生にたいしてどれほど実行してきたであろうか。ある程度は心懸けたつもりだが、果たして十分であつたろうか。

ただ、松本では、ほとんどの先生方のお住いは歩いて行ける距離にあった。また、松高の校舎の中には先生方お一人ずつの研究室はなかった。生徒が先生と駄弁するためにはお宅に伺うしかなかった。だから大抵それは放課後の夕方からしばしば深夜にかかった、ということはいえる。

研究室の完備したわれわれの大学では、学生のために自宅を開放せよなどという必要はない。相手が女子大生であることも常に考えに入れておかねばならない。それに第一、東京はあまりにも広すぎる。通勤通学の距離の開きを考えてだけでも松高の真似はできない。

しかし、松高と駒女とのあいだには、どうしても無視することので

きない共通点が一つある。それは学生の年齢に由来する「発達課題」である。中等教育を了えた十代のおわりから二十歳すぎにいたる年頃にとつて、最も必要な事柄は、生きている教師の片言隻句を通して、あるいは教師の背後に見える書棚や部屋のたたずまいに触れることによって、未知の世界の存在を嗅ぎ分け、そこに参入することであろう。学生は脱皮したがつているのだ。彼女たちは、十代までの自分の子供時代から脱け出したのである。

教師はそれを見守らなければならない。可能なかぎり時間を割いて、それにつきあうことを自分に課さなければならない。世代の断絶などという言葉をよく聞くけれども、どうもそれはきわめて傍観者的な発言のような気がする。本学の学生たちに接してきて、たしかにそのことを実感するのである。青年期の発達課題というものは、昔も今もそれほど易々と変わるものではない。